様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：２４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１０６１３

研究課題名（和文）青年期のメンタルヘルスへの早期介入プログラム導入とその評価についての研究

研究課題名（英文）Study of the introduction and evaluation of early intervention program for mental health inpuberty

研究代表者
柳川　敏彦（Yanagawa, Toshihiko）

和歌山県立医科大学・保健看護学部・学長特命教員（特別顧問）

研究者番号：８０１９１１４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　思春期の子どもの発達を取り巻く、虐待、不登校、いじめ、非行、暴力、自殺などの問題への進展予防を目的として、豪州で開発されたセミナー形式ティーントリプルP（TTPS）を導入し、その効果を検証した。対象は11～15歳の子どもを持つ養育者とした。
　TTPS前後比較57名では、子育てスタイルPSの手ぬるさ、過剰反応、多弁さのすべての項目で改善が得られ、親の精神状態DASSの抑うつ、不安、ストレスの軽減が得られ、高い満足度CSQを示した。プログラム6週間後も親36名のPS、DASSの効果の持続が確認され、子どものDASSにおいて感情的症状、問題行動、不注意/多動の改善ともにCSQの維持が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日常の家庭生活で使える具体的な技術を学べるトリプルPは、前向きな子育ての実践に役立ち、国際的に高い評価を得ている。わが国に導入されているプログラムは、主に2歳～12歳の子どもを持つ養育者を対象としたとプログラムであり、思春期の子どもを持つ養育者において、セミナー形式ティーントリプルP（TTPS)の導入は待望されていた。
　本研究においてTTPSは初めてわが国に導入され、親への心理教育としてのプログラム効果が得られたことは、社会的、かつ学術的な効果が高く、今後はさらに地域レベルへの普及が期待される。

研究成果の概要（英文）：　The seminar format Teen Triple P (TTPS), developed in Australia, was introduced to prevent progression to problems surrounding adolescent child development, such as abuse, truancy, bullying, delinquency, violence, and suicide. The subjects were caregivers with children aged 11-15.
　Pre- and post-TTPS comparisons (57 participants) showed improvements in all items of the parenting style PS: laxness, over-reactive, and verbosity, and reductions in depression, anxiety, and stress of the parental mental status DASS, with high satisfaction CSQ. After 6 weeks of the program, the parents' (36 participants) PS and DASS effects were maintained, and CSQs were maintained for both emotional symptoms, problem behaviors, and inattention/hyperactivity improvements in the children's DASS.

研究分野：小児科

キーワード：ペアレントプログラム　思春期メンタルヘルス　予防的介入

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

思春期は、親に対する反抗期を迎えたり、親子のコミュニケーションが不足しがちな時期でもあり、不登校、いじめ、非行、暴力、自殺などの問題が起こりがちである。子どもは、成長に連れて自律性が高まり、親を客観的・批判的な目で視ることも多くなる。そのような子どもに対して、思春期の子どもを持つ親は、「どこまで口や手を出せばよいのか」「子どもに何をしてあげることができるのか」と親役割や適切な心理的距離の取り方について悩む一方、不登校や非行、事件の報道等から、自分の子どもも不登校や非行などの問題が起きると不安を抱きやすい。わが国では、2005 年から「健やか親子 21」として、母子の健康水準を向上させるための様々な取組を、みんなで推進する国民運動計画を掲げ、さまざまな子育て支援を実施しているが、思春期における問題の予防的な介入への取り組みは少ない。

子どもを養育中の親を支援するペアレンティングプログラムのひとつに、トリプル P（Positive Parenting Program）がある。トリプル P は認知行動療法に基づいており、オーストラリアの心理学者 Sanders らにより約 30 年前に開発されわが国においても導入され、親の育児スタイルの改善や、子どもの行動および情緒問題に有効であることが報告されている。トリプル P は、主として 0～12 歳の子どもを持つ親を対象に開発されたが、Sanders らは、思春期の反社会的および非行行動に繋がる可能性のある問題に対処するため、思春期の子どもを持つ親を対象としたティーントリプル P を開発した。このティーントリプル P は、わが国には未だ導入されていない状況にあった。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の 2 つである。

（1）ティーントリプル P をわが国に導入すること

（2）ティーントリプル P のプログラム効果を測定すること

３．研究の方法

（1）ティーントリプル P の導入

グループ形式のプログラムは、1 グループ 10 人前後での研修であり、週に 1 回約 2 時間、計 8 回 8 週間の学びであった。本研究において、思春期の問題が生じる前の予防的な介入をねらいとして、一度に比較的多くの人数に短期間で行うことができるセミナー形式ティーントリプル P（Teen Triple P Seminar：TTPS）を導入した。TTPS は、60 分の認定ファシリテーターによる解説と 30 分間の質問タイムの計 90 分で構成されている。内容は 3 つのテーマ（チップシート）①思春期の子どもの責任性を育てる、②思春期の子どもの能力・有能性を高める、③思春期の子どもの社会性を育てる、でそれぞれ 6 つずつの重要な要素のスキルを学ぶ。TTPS 実施に向けて、ファシリテーターキット（マニュアル、セミナー用パワーポイント）、チップシート 3 種、養成講座用教材（講義ノート、養成講座用パワーポイント、養成講座用 DVD 等）を作成し、養成講座開催に向けての環境を整備した。

（2）近畿圏内の地域広報誌への募集広告の掲載と協力が得られた小・中学校の学校長・PTA 会長からのセミナー紹介により、小学 6 年生、中学 1、2 年生の子ども（11～15 歳）を持つ養育者を対象として参加者を募った。セミナーは異なる 3 会場（計３回）で実施し、参加者は、それぞれ 27 名、12 名、20 名の計 59 名であった。TTPS に参加した親に対して、プログラムの評価のため、セミナー開始前に調査依頼の説明を行い同意いただいた表の内容を実施した。比較は、対応ある t 検定で行い、5%有意水準に設定した。本研究は、2020 年 1 月に本学倫理審査委員会の承認（承認番号 2744）を得た後、調査を実施した。

		受講直前	受講直後	6 週間後
集団の特徴	基本属性	○		
	子育ての自信（PSBC）	○		
親の状態	子育てスタイル（PS）	○	○	○
	親の精神状態（DASS）	○	○	○
子どもの状態	子どもの長所と短所（CSQ）	○		○
プログラム評価	プログラム満足度（SDQ）		○	○

４．研究成果

（1）参加集団について：参加した養育者 57 名（女 50 名、男 7 名、年齢 45.8±4.3 歳）で、子どもの年齢 13.7±1.3 歳であった。プログラム評価は、セミナー前後比較 57 名、セミナー終了 6 週間後に回答が得られた 34 名を分析した。子育ての自信 PSBC は 220.2±39.0 で、以前我々が行った 2～5 歳の子どもを持つ親の PSBC は 231.4±33.1 点と比べると自信の低い集団で会った。

（2）参加者（養育者）57 名の直前・直後の比較

a)子育てスタイル（PS）は、手ぬるさ、過剰反応、多弁さ、合計ともに有意差はなかったが改善傾向がみられた。
b)親の精神状態（DASS）は、抑うつ、不安、ストレス、合計ともに受講直前と直後に有意差があり、改善がみられた。また、抑うつ、不安、ストレス、合計ともに正常域での変化であった（表）。

		全体 n=57			
		直前		直後	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
PS	手ぬるさ	3.62	1.02	3.51	1.19
	過剰反応	3.74	1.25	3.54	1.49
	多弁さ	3.89	0.91	3.67	1.05
	合計	3.73	0.77	3.56	1.05
DASS	抑うつ	4.51	7.22	3.49**	6.83
	不安	4.21	4.15	2.93**	3.19
	ストレス	7.88	7.45	6.47**	8.01
	合計	16.6	17.43	12.89**	16.66

対応のある t 検定　*p<0.05,**p<0.01

（3）参加者（養育者）36 名の直前・直後・6 週間後の推移と子どもの状態の 6 週間後の変化
a)子育てスタイル（PS）は、6 週間後に直前に比べ、過剰反応、多弁さ、合計で有意に改善した。
b)親の精神状態（DASS）は、直後は受講直前と比べ不安が改善し、6 週間後は直前に比べ抑うつが有意に改善した。
c）子どもの状態：子どもの長所と短所（CSQ）は、プログラム終了後 6 週間後は受講直前に感情的症状、行動問題、不注意/多動、および困難度合計で有意な改善が得られた。

		全体 n=36					
		直前		直後		6 週間後	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
PS	手ぬるさ	3.47	1.12	3.46	1.08	3.32	1.58
	過剰反応	3.69	1.32	3.51	1.39	3.13*	1.48
	多弁さ	3.88	0.97	3.73	0.90	3.24*	1.28
	合計	3.65	0.81	3.55	0.92	3.21*	1.28
DASS	抑うつ	4.86	8.35	4.22	7.70	3.92*	7.35
	不安	4.44	4.84	3.22**	3.43	4.83*	5.25
	ストレス	8.00	8.33	7.11	8.90	7.56	7.79
	合計	17.31	20.28	14.56	18.73	16.31	18.79
SDQ	感情的症状	1.75	2.20			1.42*	2.36
	行動問題	2.44	1.79			1.81**	1.73
	不注意/多動	3.28	2.17			2.56*	1.64
	交友問題	2.92	2.31			2.67	2.27

直後および受講 6 週間後は、それぞれ受講直前との対応のある t 検定　*p<0.05,**p<0.01

（4）プログラム満足度（CSQ）は、全体 57 名においてセミナー受講直後は、13 項目すべての得点平均値が「変わらない」の 4.0 点以上であり、「⑧パートナーとの関係の改善がみられた」、「⑬子どもの進歩・成長（変化）についての感じ方」以外の 11 項目の得点平均値が 5.0 点を超えており、満足度が高いものであった。プログラム終了 6 週間後の 36 名においても同様の結果が得られ、満足度の持続も確認することが出来た。

(5)考案
TTPS（セミナー形式ティーントリプル P）は、わが国において親への心理教育としての効果が得られ、今後は地域レベルへの普及が期待されるプログラムであると思われた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 柳川敏彦、加藤則子、藤田一郎、田中晴美、澤田 いずみ
２．発表標題 チーム連携で行う虐待防止1次から３次予防～トリプルＰの生かし方～
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yanagawa T, Kato N, Fujita I, Shirayama M, Sawada I, Matsuoka K
２．発表標題 Review of Japanese Triple P Research Papers over Fifteen Years
３．学会等名 Helping Family Children Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 柳川敏彦、澤田いずみ，加藤則子，藤田一郎 白山真知子，松岡かおり
２．発表標題 ティーントリプルPの導入と今後
３．学会等名 第6回トリプルPジャパン研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	加藤　則子 (Kato Noriko) (30150171)	十文字学園女子大学・人間生活学部・教授 (32415)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	澤田　いずみ (Sawada Izumi) (50285011)	札幌医科大学・保健医療学部・准教授 (20101)	
研究分担者	藤田　一郎 (Fujita Ichiro) (60228989)	福岡女学院大学・人間関係学部・教授 (37118)	
研究分担者	上野　昌江 (Ueno Masae) (70264827)	大阪府立大学・看護学研究科・教授 (24403)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関